

個を鍛える学力づくり／教材と日常生活をつなぐ

島本 政志

1. 習熟と個別指導

校内で学校独自の漢字検定を実施している。100問を出題する。

授業中での取り組みませ方は各担任に任せている。勤務校の場合は子どもの実態から、どの子もしつかりと漢字を習得させ自己肯定感を高めるということをねらいとしている。

漢字検定の問題は「公開」としているので何度でも本番と同じ問題に取り組ませることができる。例えば100問中70問正解の子がいたとする。まずは80点を目指し、それがクリアできれば90点を目標とするようにスモールステップで目標に到達すれば良い。

こういった「少しずつで大丈夫だ。」という考え方も子どもに伝えていく。

テスト問題を公開すべきかどうかで職員で検討したが、努力した分がそのまま

点数に繋がった方が良いと考えたからである。

勉強の仕方も併せて指導する。私が実践している方法は

- ①同じ問題を5セットくばる。そしてホッチキスで綴じさせる。
- ②一回目を実態調査として解かせる。
- ③回収し採点を行う。
- ④間違えた箇所を2回目用の問題に赤鉛筆でチェックさせる。

- ⑤その間違えた箇所のみをノートにそれぞれ一定の回数を書かせ覚えさせる。
- ⑥間違えた問題のみと取り組ませる。

この方法であれば、漢字検定対策の時間に授業時間が奪われてしまい、「授業が進まない」というデメリットが発生しにくい。

30問間違えたならそれに集中して学習していけばよいということを指導して

いく。

これは学び方の指導である。このような効率的な学習の仕方を子どもたちが学べば、他の学習にも転用が可能である。

それでも学力回復が難しい子がいれば、個別指導を行う。学力回復を願う指導しようとするに関しては、荒れている子たちも従う場合が多い。こういった子たちには生活面での指導が多くなりがちだが、その分、学習面でがんばりを評価しておくことで関係性を維持したり、より良いものにしたりすることもできる。

ポイントは

- ①その子の課題を解決するような取り組み方で実施する。課題ではないことに何度も取り組ませることは徒労感を招くことになる。歌の指導でもどこをどう直せばいいのか指摘せずに何度もやり直しをさせると、歌うことが嫌いになる。

②学校としての目標（90パーセント）を意識させながらも、前回との自分との比較で評価する。決して、「今までさぼっていたから、こんなに沢山やり直しをしないといけないんですよ。」などと言わない。

スモールステップで取り組ませ、励まし続ける。

実践は教師も子どもも労力や時間を伴う。つまりコストをかけている。

「実践」はやれば成果がでるというものではない。取り組み方を間違えると、漢字はいくつか覚えたが、学習そのものを嫌いになってしまったといったリスクもある。やった分、かけた分のコストを回収できる実践でなければ、教師も子どもも疲労感が蓄積されてしまうのである。

2. 教材と日常生活をつなぐ

漢字検定は子どもの基礎学力を上げる、自己肯定感を上げる、それらの中で個を鍛えることを目的とした取り組みの一つである。

しかし、「漢字検定があるから、とにかくがんばれ」では子どもは学習に対して興味をもちにくい。それでは、普段の「テストがあるからがんばれ」というのと同じである。

漢字の習得率が低い原因の一つは漢字がさほど好きでない、興味をもてないと

いったこともある。そこで、全校朝会で漢字検定前に漢字クイズを行った。



「これ何て言いますか？(気)」

「おお！よく知っているね！」

「どこに使われている？(理科室?)」

「うーん、おしい！確かに教室ではないです」

答えは校舎前にある地面のマンホールに書かれている「電気」である。その後、全員で書き順を確認する。

「身の回りにたくさんさんの漢字があります。がんばりましょう。」と言った。

また採点基準についても確認しておく。漢字は字形の許容範囲がある。そこで、「原則、漢字ドリルやスキルで教えてもらった通りに書きなさい」指示する。

このことで、「教師によって採点基準に

違いがある」といったクレームも回避できる。子どももより一層、しつかりドリルやお手本を見て書こうとする。それでも、許容範囲で書いてきたものに関しては正解とする。一般社会で正解なものを学校で不正解にする必要はない。『常用漢字表の字体・字形に関する指針』(文化庁文化審議会国語分科会)という資料もある。

Q45 はねるか、とめるか(「改」など)

例えば、「改」という漢字の「己」の最後のように、印刷文字でははねていますが、学校でははねないと教わった漢字があります。どちらが正しいのでしょうか。

A どちらで書いても誤りではありません。手書きの楷書では、とめる書き方が多く見られますが、明朝体では、はねているのが一般的です。

「改」については、「字体についての解説」にも、両方の書き方が下記のように例示されています。

改 - 改 改 改

伝統的に、手書きの楷書では、明朝体のようにはねる形で書くことは少ないのですが、戦後の教科書にも、次のように、はねる形の例が見られます。どちらも誤りではありません。

改 改 改